

## 音楽科文化系卒業論文・卒業制作のアウトプット

音楽科 なかにしあかね

音楽科文化系では、毎年4年生全員が卒業研究に取り組み、音楽文化専攻の学生は卒業論文、応用制作専攻の学生は卒業制作とコメンタリー、という形にまとめて提出し、口頭試問を受けた上で、卒業研究の単位が認定される。音楽科には実技系と文化系の2つの系があり、演奏実践を主とする実技系の学生が、全員、公開の卒業演奏試験で演奏するのに対し、文化系の学生については、これまで、口頭試問という性質上、全員の研究内容を一般公開することはできなかった。音楽科行事としての「卒業演奏会/論文・制作発表会」はあるが、一部の学生しか出演できず、時間制限も厳しいため、文化系学生の研究の全容を知るには足りない。発表することによって自身の研究を見直す4年生の学びの機会としても、また、先輩の研究を知ることから学びたい下級生達にとっても、さらには学内外への公開を通して地域との連携や知的刺激の交流を図る意味においても、本教育推進研究による全員発表の機会は、貴重なものであり、また、望まれていたものであった。

2010年度は11人の4年生が、それぞれの一年間の研究成果の発表を行った。担当教員は3名で、音楽文化専攻の学生は住川頼子教授(学生4名)、大内典教授(学生4名)、応用制作専攻は筆者(学生3名)が、それぞれ一年間マンツーマン指導した。

2010年度 宮城学院女子大学音楽科  
文化系創設20周年

# 文化系コロキウム

文化系4年生による卒業研究の発表会。4年間の学習成果の集大成です。  
音楽を縦横無尽に語り、表現します! ぜひお越しください!!

**発表者**

- 藤田 麻美 (宮城県松島高校卒) 「日本人のレガエ受容」
- 菅野 真菜美 (山形県立南陽高校卒) 「良いピアノ教育を考える ～カワイとヤマハの音楽教育を事例に～」
- 宮崎 麻也子 (宮城白石女子高校卒) 「日本音楽の伝承と発展～三味線音楽を題材に～」
- 諏訪 未希子 (青森県立弘前中央高校卒) 「音楽配信と音楽聴取」
- 菅原 悠 (宮城県松島高校卒) 「王朝文学と宮廷音楽 ～平安時代における文学作品と楽書から～」
- 鈴木 香葉子 (山形市立仙台高校卒) 「日本における西洋音楽受容の一例～ベートーヴェン音楽とドビュッシー音楽の受容にみる～」
- 佐々木 美穂 (宮城県石巻好望館高校卒) 「楽部仙台における音楽イベント」
- 西條 彩花 (宮城県利根高校卒) 「絵本の読み聞かせにおける(声)の表現とコミュニケーションの観点から～」
- 橋本 美智 (山形市立仙台高校卒) 「発想を広げる～絵画からのインスピレーション～」
- 佐藤 梨奈 (宮城県古川黎明高校卒) 「ことばと音楽による自己表現 ～女声合唱作品の制作と演奏を通して～」
- 佐藤 愛美 (山形県立山形北高校卒) 「楽部の特性を活かす ～ヴァイオリン、チェロ、ピアノによる三重奏作品の制作を通して～」

2011年2月9日(水) 18:00開会(開場17:30) 仙台市青年文化センター 交流ホール

入場無料

Information  
2010年度 宮城学院女子大学音楽科 卒業演奏会/論文・制作発表会  
2011年3月3日(木) 卒業論文・制作発表会 18:00開演  
卒業演奏会 19:00開演  
仙台市太白区文化センター 楽楽堂ホール

文化系の専攻別は、2年次から3年次に進級する際に、学生本人の希望により決定される。2年次の文化系実習授業の最終課題として個人研究が課されるが、その時点で、音楽文化専攻に進みたい学生は研究発表を、応用制作専攻に進みたい学生は作品制作発表を行い、それによって、3年次の専攻が決まる。3年次で応用制作専攻に登録した学生はそのまま筆者の指導のもと4年次の卒業研究まで進む。音楽文化専攻についてはさらに、3年次から4年次に進級するに際して、学生の希望する研究テーマによって、担当教員を選択する。少人数で1年生の時から各授業でゼミ担当者3名の目が行き届いていることもあり、専攻選択や、担当教員選択は、学生のテーマ選択にあたっての積極的な迷いは当然ながら、サポート体制は安定している。

学生の卒業研究のアウトプットの方法として、文化系ではこれまで、紙媒体として「要旨集」の発行を行い、全学生への配布や、音楽科催事における配布を行ってきた。また、ホームページ上でも全卒業研究テーマを公開し、問い合わせに対しては要旨集の送付なども行い、論文本体の閲覧希望にも対応している。また、前述の毎年3月に行われる「卒業演奏会/論文・制作発表会」において成績優秀と認められる一部の学生による発表を行っているが、全員の研究発表という形でのアウトプットは本研究において初めて企画された。

会場は、仙台市青年文化センター交流ホールで、本学からも近く、地下鉄駅至近でコンサートホールなどに行き慣れている観客が来場しやすい立地条件などが、予算も含めた会場選択の理由である。また、初めての企画で来場者数が予測しづらいため、平土間の広いフロアで、椅子席の並べ方で客席を調整できること、スクリーンが大きく、オーディオ設備もあり、照明に至るまで学生スタッフによる運営が可能なことなどが、この会場を使うメリットとしてあげられる。

日時は、2011年2月9日(水)午後6時開会とした。卒業研究の提出期限が2011年1月12日であり、全員が提出したことを確認してからの広報開始となるため、1カ月弱の広報期間をもうけたこと、口頭試問が1月27日であり、その後発表準備をして当日に備える時間的猶予を考え合わせて、ふさわしい時期を決定した。午後6時開会は、終了後に来場者と現役学生の交流の時間をもうけるため、早めの開会とした。

当日の来場者数は100名弱、うち文化系卒業生は20名以上の来場があった。現役学生は発表

者含めて計28名、本研究担当の教員・副手計4名を含む音楽科スタッフ9名が参加した。

当日の流れを時間経過に従って報告する。まず、午後2時から担当教員・副手と学生で会場設営を開始し、照明設定、発表リハーサルを行なった。並行して、過去16年分の卒業研究要旨集の展示などを設営した。午後5時過ぎにリハーサル終了、休憩を挟んで5時半に開場した。

展示した過去の要旨集は、卒業生が懐かしく手に取る場面もあり、また、文化系の活動を知りたい方が興味をもってコピーを所望されるケースもあった。



尚、この展示に関しては、過去の卒業研究テーマのみを一覧にした資料をあらかじめ配布し、そこから興味のある要旨を見るという流れを作れば、より来場者にアピールしたのではないかと、この感想を後日頂いた。過去の卒業生は150名以上おり、全員の研究テーマをリストアップするだけでも相当量の資料になると思われるが、来場者全員に配布するかどうかに関わらず、文化系20周年の本年を節目として資料を作成しておくことは検討の価値があると思われる。

6時に予定通り開会、学生のアナウンスによって進行した。発表者は次頁の通りである。当日の

急な体調不良等により、4番の諏訪未希子と11番の佐藤愛美は欠席したため、計9名の発表となった。

#### 【音楽文化専攻】

1. 鎌田麻美

「日本人のレゲエ受容」

2. 菅野真菜美

「良いピアノ教育を考える～カワイとヤマハの音楽教育を事例に～」

3. 宮崎麻也子

「日本音楽の伝承と発展—三味線音楽を題材に—」

4. 諏訪未希子

「音楽配信と音楽聴取」

5. 菅原悠

「王朝文学と宮廷音楽～平安時代における文学作品と楽書から」

6. 鈴木香菜子

「日本における西洋音楽受容の一様相～ベートーヴェン音楽とドビュッシー音楽の受容にみる～」

7. 佐々木美穂

「楽都仙台における音楽イベント」

— 休憩 —

8. 西條彩花

「絵本の読み聞かせにおける〈声〉～その表現とコミュニケーションの視点から～」

#### 【応用制作専攻】

9. 橋本美雪

「発想を広げる～絵画からのインスピレーション～」

10. 佐藤梨奈

「ことばと音楽による自己表現～女声合唱作品の制作と演奏を通して～」

11. 佐藤愛美

「楽器の特性を活かす～ヴァイオリン、チェロ、ピアノによる三重奏作品の制作を通して～」

学生はそれぞれ、発表内容や方法を担当教員と相談し、指導を受けて当日に臨んだ。

1. 鎌田麻美「日本人のレゲエ受容」

ジャマイカン・レゲエとジャパニーズ・レゲエの成立、違いと、日本における受容について、パワーポイントを用いて発表した。



2. 菅野真菜美「良いピアノ教育を考える～カワイとヤマハの音楽教育を事例に～」

ヤマハとカワイという日本の2大音楽教育企業の成立やメソッドを研究し、よいピアノ教育をめざすというとはどういうことかを考察し、卒業後、カワイのピアノ講師として就職する発表者本人の探求の成果を発表した。



平安期の王朝文学における楽器の登場とその意味について、先行研究をもとに自分なりの考察を試みた。



3. 宮崎麻也子「日本音楽の伝承と発展—三味線音楽を題材に—」

三味線音楽が現在の日本でどのように伝承され、発展の可能性をもちうるか、個人教授の現場と学校教育の現場での調査をもとに発表した。

6. 鈴木香菜子「日本における西洋音楽受容の一樣相～ベートーヴェン音楽とドビュッシー音楽の受容にみる～」

近代日本でどのようにドイツ音楽とフランス音楽が受容されてきたかを、ベートーヴェンとドビュッシーの例をもとに考察し、発表した。日本人作曲家がどのように影響を受けたかまで言及する独自性ある発表となった。



4. 諏訪未希子「音楽配信と音楽聴取」  
体調不良により欠席。



5. 菅原悠「王朝文学と宮廷音楽～平安時代における文学作品と楽書から」

7. 佐々木美穂「楽都仙台における音楽イベント」  
楽都仙台と呼ばれる仙台のストリートイベン



トに焦点をあて、実際に自身がボランティアとして参加したり、出演者としての経験もふまえて、広く仙台の地域性やストリートイベントの意義を考察した。



基礎研究をもとに、ダリ一枚の絵から5通りの発想方法をもって、5曲の全く異なる音楽作品を制作した。スクリーンに絵画を映し出し、5曲全曲をノーカットで発表できる、唯一の機会となった。



#### 8. 西條彩花「絵本の読み聞かせにおける〈声〉～その表現とコミュニケーションの視点から～」

絵本の読み聞かせにおける「声」に焦点を当て、さまざまな読み聞かせ形態の現場を丁寧に調査し「声」の役割について考察した。



#### 10. 佐藤梨奈「ことばと音楽による自己表現～女声合唱作品の制作と演奏を通して～」

谷川俊太郎氏の詩に、詩人の許可を得て合唱曲を作曲。詩の選択、作曲、演奏の過程を通して、ことばと向かい合い、自身の変化を克明に記録した。全3曲の組曲をノーカットで再生した。



#### 9. 橋本美雪「発想を広げる～絵画からのインスピレーション～」

11. 佐藤愛美「楽器の特性を活かす～ヴァイオリン、チェロ、ピアノによる三重奏作品の制作を通して～」  
欠席。

アウトプットは出しっぱなしではなく、フィードバックをどのように得るかが重要であり、発表に対する意見や助言、質問などを受けることにより、発表した本人だけでなく質問する側も学ぶことが、本研究の大きな意義である。そのための仕込みとして、文化系の過去16年の卒業生(文化系は本年設置20年を迎える)に案内を送り、発表終了後の交流会に積極的に残って頂くようお願いしておいた。卒業生達が、学生の発表内容だけでなく、発表のしかたまで細かくコメントやアドバイスをしてくれたことは、学生達にも大きな収穫であったし、下級生を含む現役学生達が、卒業してからもさまざまな形で音楽と関わっている話を直接聞くことができ、二重の収穫であった。

また、あらかじめ学生に話を聞きたいとお申し入れのあった河北新報の記者佐藤陽二氏も交流会に加わって下さり、学生達はプロのインタビューを受ける側に立つ、絶好の学びの機会となった。なお、佐藤氏の取材成果は一週間後の2月16日付河北新報夕刊「河北抄」にて紹介された。

さらに、当日、来場者に音楽科の催事のご案内を希望される方に登録して頂く用紙を配布していた(音楽科の催事では毎回配布している)が、その用紙に、「勉強になった」「興味深かった」「このような機会があればまた来場したい」などのコメントを書いて下さった一般の地域の来場者が数人おられた。

本研究は、発表者となった学生達自身の学びと、当日スタッフとして参加する下級生達の学びの機会の創出を主目的としたものである。同時に、卒業生やご来場下さった地域の方々、発表者の高校時代の先生方や、音楽愛好家の方々に、音楽の様々な側面を再認識して頂く機会ともなり、さらに、河北新報という地元新聞社によって、より広い範囲に学生の活動を知らしめることができたことを、ありがたく思う。今後、さらなる内容の充実をはかるためには、日々の教育の充実を蓄積するしかない。それこそが本教育推進研究の本義であると考えている。

**河北抄**  
もつと卒業生から通りの曲を作った学生もいる。  
宮城学院女子大音楽科では、文化系コースの学生による卒業論文発表会を開いた。会場は仙台市青葉区「書葉区」。  
川俣太郎さん、谷川さん、の詩に曲をつけて合奏曲を作った。  
「何度も詩を読み返して、イメージを膨らませた。この1年、研究を続けながら自分自身と向き合ってきた。研究には、音楽科には、研究系と文化系があり、文と向き合ってきた。研究系は主に調査研究や、教員志望で、作曲も続けた。音楽制作を学ぶ、コーラス開成20周年を記念して、初めて発表の場を、外発表を取り入れては、学外に移した。  
他大学も、卒業生の発表の場を、どうだろうか、学生にどうやって発表の場を、外発表を取り入れては、学外に移した。  
テーマは多彩だ。絵本、小説、音楽、家族の話し、王明文学と宮城の歴史、少子化で悩む音楽、「楽都仙台」受贈者不足に悩む大学おける音楽イベント」にとっても、売り込むなど、グリの一枚の絵、チャンスである。